



Rokko Catholic Church Bulletin

カトリック六甲教会 教会報

2014

1

No.505



あけましておめでとうございます



主任司祭 松村信也 sj

1995年に始まったその年の世相をあらわす漢字一字。師走の12日、その年の漢字一字が決定され、京都清水寺の奥の院舞台上で公表されます。2013年、その一文字は「輪」でした。

2020年東京オリンピック招致のために働かれた方々の協力の輪が、見事なハーモニーを奏し、人々の心に感銘を運んだことで開催決定となった。また、弱小プロ野球球団であった東北・仙台に本拠地を置くチームが、一致団結した結果、日本一のチームとなり東日本の被災地の方々をはじめ、すべての人に歓喜の輪を運んだ。一方、秋雨前線と重なった台風による伊豆大島の土石流災害、フィリピンの島を直撃し大勢の犠牲者を出した巨大台風。それらの災害に対して、日本をはじめ世界各国からの支援の輪が広がりました。これらをつなぐもの、そのつながりを2013年漢字一字の「輪」が選ばれたのです。

「輪」、この輪は人と人との“絆”であり、人から人へ運ばれる愛のしるしです。それは、私たちに“生きる意味”と“生きる力”を教えてくれる大切なものです。

2011年3月11日、東日本を襲った地震と津波は、人の心と体を無情に引き裂いたのです。「神に信頼、愛・・・」、「生きる意味などないのでは・・・」、「人生に希望なんてないのでは・・・」、早三年が過ぎようとしているにもかかわらず、いまだに復興していない悲惨な情景。心の傷を癒すどころかますます傷を深める被災者の方々の現実を知らされる時、誰もがそう思わざるを得ないのです。そんなある日、一人の男性が重かった腰をようやく上げた。津波で三人の子どもを奪い取られ、屍のように絶望の日々を過ごしていた。そんな彼のもとに、奇跡と思える亡くなった子どもたちの写真が届けられた。その時、彼は子どもたちと過ごした日々の思い出から、子どもたちの声が聞こえてきたと言う。『父さん、くじけないで僕たちのために頑張ってください』。その日彼は、再び子どもたちとの思い出をしっかりと抱いて生きることの大切さ、生きて子どもたちが喜ぶことを果たすこと、それが自分に与えられたこれからの生きる意味であることを、子どもたちとの思い出から知らされたのです。

子どもたちの姿を見ることはできません。しかし、彼の心の中には、鮮明に子どもたちの声も姿も刻まれています。その親子の強い絆が現実となって、再びその絆の輪が子どもたちとの思い出から広がり「生きる力」を届けてくれたのではないのでしょうか。

「どんなに人生に絶望したとしても、人生があなたに絶望することはありません」(V・フランク)と子どもたちとの思い出が父に伝えてくれたのです。「恐れることはない」ありのままのあなたでいいのです。だから「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ11:28)と主は約束してくださいませ。

「輪」、それはまた“和”でもあるのです。輪は人の心を和ませてくれます。人は心が和むとき「幸せ」を感じることができ、幸せな気持ちになれるのです。人生は忍耐の繰り返しかもしれません。しかし、与えられた人生を素直に受け取って、どのように生きるかが大切なのです。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11：29-30)



新シリーズ

「何でも知っとこ」(10)

主任司祭 松村 信也 sj

昨年、第二バチカン公会議公文書の改訂公式訳が出版されました。これまでの公文書と内容が異なるということではなく、読みやすく、かつ新しく訳語を統一した公式訳となりました。

この改訂公式訳は、信徒の方々にも再度読み直して戴き、よく理解して欲しいという意味合いも込められているのだと思います。そこで特に今回は、信徒の方々に関わる『信徒使徒職に関する教令』から、その主な内容理解のため各章ごとにまとめました。この解説は三回に渡って連載します。少し専門的な説明になりますが、ご参考になれば幸いです。

第一章：使徒職への信徒の召し出し

①キリスト者としての信徒の自覚。

はじめに「信徒(laicus:layman)」という語が、第二バチカン公会議の準備委員会において問題にされた。それはラテン語の laicus が好ましくない意味をもつ laicism(聖職否定の在家主義) や laicisation(還俗、教会の支配よりの脱却) 等を想像させるという理由からであった。しかし、準備委員会は laicus に代わる適当な用語を見出すことができず、この語に明確な定義を表示することで落ち着いた。そこで定義として教会憲章 31 項で「ここで言われている信徒とは、聖なる叙階を受けた者、ならびに教会において認可された修道身分に属する者以外のすべてのキリスト信者のことである」と述べる。しかし、果たして信徒とは、そのような消極的なものだろうか。かつて日本では、教会の中であって神から特別な召命を受けていない一般大衆とか、平信者という言葉を使っていた。そこから理解される信徒とは、カトリック教会を構成している底辺的存在であった。このような信徒の理解が正しいのだろうか。

第二バチカン公会議の準備委員会は、この問題についてかなり長い期間に渡って議論が交わされた。その結果、「信徒」の語に一定の定義を与えるよりも、「信徒」という身分を明確にし、それを詳細に現すことになった。それが教会憲章 31 項に上述に引き続き述べられる。「すなわち、洗礼によってキリストに合体され、神の民に組み込まれ、自分たちのあり方に従ってキリストの祭司職・預言職・王職に参加する者となり、教会と世界の中で自分たちの分に応じてキリストを信じる民全体の使命を果たすキリスト信者のことである」。それは、一般信者という消極的な立場ではなく、現世的な事柄に従事し、それらを神に従って秩序づけ、その神の国の追求を独自の召命とするものであって、神から召されたものである。このことをまず理解したうえで、『信徒

使徒職に関する教令』を読むことが大切である。このようにしてはじめて教会憲章 31 項の後半部分を“洗礼を受けたすべての信者は使徒職遂行の権利をもち、その実践の義務は信者一人ひとりに課せられている。老若男女を問わず、身分、職業、教養、環境のいかんにかかわらず、キリスト信者は洗礼を受けたその瞬間から、神によって、使徒・宣教者となるよう召されている”と理解できるのではないだろうか。このことを前提にして、一人ひとりの信者が、真のキリスト者の姿を、信仰に根ざした生活をもって世に示し、キリストの使徒として世俗的世界の中で、人々と関わっていくのである。

②信徒の使徒職とは何か。

信徒はそれぞれの能力に応じて、積極的に教会の発展に寄与するように召されている。したがって、信徒はそれぞれの能力に応じて、積極的に教会の発展に寄与するように召されている。従って、信徒が全世界を実際にキリストへと秩序づけるため働くとき、使徒職を行うのである。その働きはキリストの証となり、人々の救いに奉仕すると本教令 2 項で言っている。これは、信徒もキリストの祭司職、預言職、王職にあずかる者であり、教会と世間において、神の民全体の使命における自分の役割を果たすのである。従来、信者の務め（日曜のミサに与かる、告解の秘跡を受ける、聖体訪問する、ロザリオを唱え朝夕の短い祈りをする等）さえ守っている人は熱心な信者と言われていた。しかし、真に熱心であれば、自分の受けた賜物を世に伝えて行こうと行動する。この両方が兼ね備わってこそ真に熱心な信者であり、これらの使命は二つではなく、本来一つのものである。また信徒は、特に一人ひとりの生活の証を通して、キリストを世の人々に現すように召されている（教会憲章 31 項）。それは信徒が、世間の人々の中にあつて、世間の人々とともに生き、家庭を持ち、世間の職業に従事しているからである。信徒であればこそキリストを世に現すために、家庭を持たず世間の職業にも携わらない聖職者にはできないことをすることができるからである。

使徒職は、聖霊がすべての信者の心の中に注いでいる信仰によって、愛に促されて神の栄光と人々の救いのために働かねばならない。特に、自分の司牧者と交わりながら行動されるべきものである。つまり、それは自分の外部にむかって働きかける行動である。しかし、注意しなければならないことは、すべての行動が、どのような行いであっても、行動の価値はその行動の量や性質によるのではなく、行動の動機にかかっているのである。またその行動の動機とは、キリストが望まれたように望み、キリストが愛されたように愛し、そして、キリストが耐え忍んだのと同じ意向を持って、私たちも耐え忍ぶことである。キリストは、すべてを父の栄光という純粋な意向を貫かれたのである。そのために信徒は、聖霊の恵みの場であり、かつキリスト信者の中心である典礼に積極的に参加しなければならない。

第二章：その到達すべき諸目的

神の国とこの世の区別はあるが、これを関係のないものとして考えるのではなく、この世の人間は、生活を通して人間性を完成していく場所に置かれている。その完成とは、即ち、キリストの福音を世に知らせることと、キリストの恩恵を世にもたらすことである。神ご自身が人間の中に植え付けられた自然の人間性、それは、人間の魂の奥にある無限なる充足への憧れ、人間精神を飾る知恵、意志、良心、そして人間に潜在する本能であり、欲望なのである。これらを正しく活かしつつ自らを向上させて高度な人類文化である大共同体をこの世に築くこと、これが神の望みであり神への愛と人間相互の愛は一つのものだからである。信徒が真心をもって同胞に尽くす愛といたわりは、神への愛に直結する。従って、すべての活動の根底において、キリストによって示された愛が深く根ざしていないなら、それらは真に信徒の使徒職ではなく単なる社会運動にすぎないだろう。



六甲カトリック教会の皆さまへ

シスター・小沢 FMM

新年明けましておめでとうございます。私たちが原町に来てから、六甲教会の皆様には大きなご支援をいただき、心から感謝しております。私たちは被災地において労働力を提供することができますが、お金がないと動けない部分も沢山あって、六甲教会からの義援金は、「野菜くばり」「仮設のカフェ」などを通して、被災地の方々のための大きな力になっています。様々な協力の仕方が集まって支援が成り立つことを実感しています。ありがとうございます。

忘れないで！

～東日本の被災地から～

様々な協力の仕方を結集して

シスター小沢 FMM

12月15日、原町出身のオルガニスト青田絹江さんが中心になって立ち上げた聖歌隊「エピファニー」の第1回の「クリスマスコンサート」がありました。原町教会の建物は収容人数も少なく、また教会には来にくいと感じる人もあるので、特別に結婚式場のチャペルをお借りしました。結婚式場としてもチャペルをこのよう使ったことは初めてだったそうです。

第1部はオルガン演奏と歌がありました。そして第2部では会場の皆さんと一緒にキャロルを歌いました。皆さん元気よく歌ってくださいました。今回のコンサートに参加してくださった沢山の皆さんから「宗教的な雰囲気がとても良かった」と仰っていました。またバージンロードの入口に飾った馬小屋が雰囲気を盛り上げてくれたのですが、これは六甲教会の結婚講座のグループから贈っていただいたものです。

「馬小屋を見たのは初めて」という方も沢山いらっしゃいました。この聖歌隊はオルガニストを除くとメンバーは12名。クリスチャンは私たちを入れて5名。教会音楽が大好きな人たちの集まりですが、教会に通っているというわけではないので、この馬小屋はクリスマスの意味を知らせるのを助けてくれたと思います。

大震災発生から2年9カ月が経ち、自分の家を再建する人々も増えてきて、あちこちで空き地に家が建ったり、1階の家を壊して3階建てに直したり、多くの努力がなされています。一方、原発から近く、帰宅困難な地域に家があるために仮設住まいを余儀なくされている方々や、「立ち入り禁止」が解除になって帰宅できるようにはなったものの、インフラの整備ができあがらないので戻れないと言う方々もたくさんいらっしゃいます。エピファニーのメンバーにも、浪江出身で、避難生活が続いている方がおられます。また、私たちの住んでいる近くでも、結婚して働いていたお嬢さんが職場で被災して津波に飲まれ、お孫



六甲教会からいただいた馬小屋
— 結婚式場のチャペル入口

さんたちだけが残ったとか、聞くのも辛い話はいろいろあります。心のケアだけではなく、現実はどうしたら良いのか、誰にもわからないようなこともあります。

まもなく3回目の春がめぐってきますが、原町教会の狩浦神父様は、「3・11」よりも「3・15」の方を大切にしたい、とおっしゃっています。「原発」にもっともっと真剣に向き合わないといけないと考えておられますが、自分あるいは親戚の誰かが何らかのかたちで原発に関わって来られたのが多い地域で、原発とどう向き合うか、これも本当に心の痛む大きな問題です。

さて今朝、起きて家の外に出てみたら一面真っ白、私たちの小さな車にも何センチか雪が積もっています。箒で雪を払ってエンジンをかけ、フロントガラスの氷を溶かしてから教会のミサに出発する。私たちにとってはこの作業も新しい経験ですが、寒さとのたたかいは東北地方では珍しいことではないのでしょうか。私たちもそのうちに慣れるように頑張ります。

年月が経つと、解決へと向かえるようになる問題も多いですが、時間が経っても少しも解決へと向かえないものや、新たな問題も出てきています。どうぞ、これからも被災地の方々のためにお祈りとご支援を賜りますよう、心からお願いいたします。

皆さまにとって、新しい年が祝福に満ちたものとなりますようにお祈りいたします。



<行事報告>

オルガンメディテーションー待降節によせて



2013年11月30日(土) 夕方5時より、オルガンメディテーション Vol.8「待降節を迎えて」という題で、音楽と祈りの集いを行いました。

ヴァイオリン、ソプラノ独唱、オルガンの4人の演奏と、聖書の朗読で待降節にちなんだ音楽を集め、静かな祈りの時間を持つことが出来ました。

待降節の音楽は深い祈りに満ちたものが多く、プログラムを考える時から、どうして、イエス様が私たちのもとに生まれてくださったのかということ、考える良い機会になりました。バッハの音楽では待降節の音楽は「十字架の音形」という音の形が多用され、十字架に付けられることによって、私たちを救うために、私たちのもとに生まれて下さると言うことを、改めて考えなおしました。

土曜の夕方と言う忙しい時間帯にもかかわらず、いらしてくださった方は、本当に静かに時間を共有して下さり、嬉しく思いました。

音楽のもとでみんなの祈りが一緒になった瞬間のようでした。

三浦



11月30日(土)の午後5時に開催されたオルガンメディテーションは、最初土曜日の夕方ということで動員数が心配でしたが、開演時間が近づくにつれそこそこの人で聖堂内の席も埋まりました。最初に三浦さんのオルガン演奏に始まり、藤原さんの朗読と続き、土曜日の夕に相応しい、厳かで静かな演奏会となりました。約1時間、三浦さんや清水さんのオルガン演奏にソプラノ歌手の浅野さん、ヴァイオリニストの天津さんも加わり、次から次に奏でられるバッハ曲は聴く者の心を捉え、聖堂内は待降節らしい雰囲気が漂っていました。



このオルガンメディテーションも今回が第8回目となりますが、回を重ねるにつれ知名度も上がってきているようです。これからもオルガンチーム一同、更に良い企画を考えていきますので、次回もよろしくお願い致します。

オルガンチーム 蛭田



第12回クリスマスコンサート感謝報告 (12月8日)

今年で12回目を迎えましたメサイア演奏会は、12月8日待降節第2主日に主聖堂はもとより小聖堂までいっぱいになる聴衆の方々にお集まり頂き開催されました。

70名の合唱団は、エリック・コロン先生の御指導のもとヘンデル作曲メサイア救世主生涯の三部曲詩の中からソロを含め14曲余りを歌い上げました。

エリック・コロン先生の指導は、宗教的解釈の深さと厳しく、優しく、楽しい一時です。毎年9月から週一度の練習に70名の人数を集め、12回という回数を重ねることができましたこととお解り頂けると存じます。信者・信者でない方にかかわらず音楽の持つ素晴らしさと魅力ある指導者によって、共に学び作り上げていく作業の中で喜びが熱唱へとつながるのでしょうか。昨年、このコンサートを聞かれた方が「どうしても歌いたくて」と、今年、私の隣で思いを込めて歌っておられました。歌うこと、歌の持つ素晴らしさに胸が熱くなる思いでした。六甲教会の大聖堂の中で応援して下さる聴衆の方々の熱い思いが演奏する者を燃え立たせて下さいます。

六甲教会の御配慮、聴衆の方々、演奏者の方々に、メサイアを開催いたしました実行委員会といたしまして感謝以外ございません。

なお、堂内で頂きました献金(¥107,455)は六甲教会を通して東日本災害義援金とさせて頂きました。厚くお礼申し上げます。

感謝のうちに クリスマスコンサート実行委員会



メサイアを歌える喜びに感謝して



主のご降誕をお祝い申し上げます。

12年の歴史の重みがコンサートの成功を導いたことと思います。

そして、実行委員の方々のご尽力とご配慮が、歌うメンバーと聴衆をひとつにしてアドベントにふさわしい一日になりました。特に、手作りのチラシやプログラムから伝わってくる優しさには、感激いたしました。

コロン由子先生のご指導のご縁がありまして、3回の素晴らしい体験をすることは、とても助かり感謝しております。仕事と雑事に追われてばかりの生活なのに、私までこのような大曲が歌えそうに思えて、胸が高鳴り参加いたしました。

また、メサイアを聖堂で歌えることもとても魅力ですし、大切なメッセージを大勢の人々と共有嬉しいひとときとなりました。合唱団のなかには練習と本番の指揮者が異なることも多々あります。そんな中、エリック先生の心に語りかけるようなご指導に引かれて、通っておりました。

本当にありがとうございました。

これからの教会のご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

渡部

第 55 回神戸市民クリスマス

片柳弘史(助任司祭)



第 55 回神戸市民クリスマスが、あふれんばかりの祝福のうちに終了しました。6月に行われた第 1 回の準備委員会から始まって、およそ半年にわたって入念な準備を重ねてきた大イベントでした。すべてが無事に終わって、ほっと一息という感じです。

六甲教会からは、中川滋さんと吉村千里さんが私と一緒に委員として参加して下さいました。お二人は子どもプログラムを、わたしはプロテスタントの教職者の皆さんと一緒に礼拝を担当しました。今年の礼拝は、

日本キリスト教団神戸栄光教会の若手伝道師、汐碓直美先生が全体をコーディネートして下さいました。東日本大震災によってもたらされた闇が、イエス・キリストの御ことばのうちに光に変えられていくプロセスを、スライドショー、音楽の演奏、聖書朗読などによって見事に表現した礼拝でした。六甲教会の教会学校卒業生で、日本聖公会神戸聖ミカエル教会信徒の江見かのんさんによるバイオリンの演奏や、音楽家のこいずみゆりさんによる新曲「インマヌエル」の披露もありました。わたしは、闇から光への転換点となる説教を担当。東日本被災地での実際の体験を話させて頂きました。

プロテスタントの皆さんと一緒に作業する中で、今年もたくさんの学びがありました。万人司祭主義をとり聖職者を置かない教会の土壌の中で磨き上げられた、牧師・伝道師の皆さんの徹底した謙遜さ、柔和さ、細かなところまで信徒への配慮を怠らない司牧(牧会)的センスには、感嘆せざるをえません。また、御ことばにすべてをかけ、語ったことを一点の妥協もなく生き抜く厳しい信仰の姿勢に接し、背筋が伸びる思いがすることもたびたびありました。違ったものが互いへの尊敬を持ち、学びあう姿勢で出会うとき、計り知れないほどの恵みを与えられるということ、しみじみと実感した市民クリスマスでした。このすばらしい行事が、いつまでも続いていくことを心から願わずにいられません。



第 55 回神戸市民クリスマスは大盛況でした



神戸市民クリスマス実行委員 鈴木

20日午後3時実行委員が集まってお祈りをしてから準備にかかりました。六甲教会からは中川、吉村両氏がこどもプログラム担当、わたしはYMCAのスタッフとしてキャロリングの担当で 50 名を超える元町コースを受け持ち、橋岡さんは北野コースで六甲混声ほか 40 名のキャロリングのリーダーとしてそれぞれが持ち場に行きました。

キャロリングが始まると途中からの参加者も加わり大きな輪になりました。最終の栄光教会に着くころには寒さも忘れて大きな声で力いっぱい歌いました。

みんなを待っていたのは栄光教会ほかのみなさまの心からのおもてなし「豚汁」でした。寒いキャロリングから帰った私たちには最高の食べ物でした。

そして何よりも素晴らしかったのは7時30分から始まった「祈りと祝福のとき」での片柳神父さまのお説教でした。400人の参会者に向かって神父さまはおっしゃいました。

自然災害での被害について「人間の無力さを認めること」「自己過信への戒め」「立ち直るために神さまが与えて下さったお恵みである」というお話がみんなの心を打ちました。

最後に古泉ゆりさんが自作の賛歌「インマヌエル」をうたわれて、会衆と大合唱になったのが感動的でした。

六甲教会からの一般参加者が例年より少なかったのが残念でしたが、市民クリスマスは神戸地区のカトリック教会の人たちの献身的な協力がなければ成功しない大切なイベントだと思います。



クリスマス音楽の集いを終えて（12月23日）

12月23日小春日和の中、クリスマス音楽の集いが行われました。一足早いクリスマスを音楽で祝うこの集いは、教会行事としてオルガンチームの企画のもとで始まり今年で3年目を迎えます。

1部は松村神父様のお話の後、主の誕生への物語のナレーションを挟みながらの演奏です。良き日を知らせる煌びやかなオルガンから始まり、羊飼いが星に導かれ歩く場面は2重奏のバイオリン、マリアを賛美するフルート独奏、天使の喜びをソプラノの独唱と女声コーラスで、最後は公現の喜びをオルガンで奏でました。演奏してくださったのは六甲教会信徒でプロの演奏家ばかりです。信者でない方にもわかりやすい構成で、クリスマスをお祝いする気分が高まったと感想を頂きました。

2部はコリンズ神父様の素敵なお話の後、荘厳なグレゴリオ聖歌や楽しいクリスマスキャロルで祝いました。今年は初めての試みとして、教会内外にも参加者を募り「クリスマス音楽の集いで歌おう合唱団」を編成しました。聖歌隊メンバーの他に外部から6名、聖歌隊以外の信徒の方も数名加わり、迫力ある立派な混声合唱団ができました。森一弘司教作詞の「聞かせてください」はフルートをいれたアレンジで、そしてなじみのキャロルの数々。最後には「来たれともよ」を参加者とお客様全員で、ラテン語、日本語で合唱し、聖堂を喜びの歌声で包みました。

クリスマスのこの時期は、教会をはじめ様々な場面で活動をされご多忙な方ばかりですが、皆さん時間を縫っては今日の日に向けて練習を重ねて、すばらしい演奏会になりました。

日程的に集客が少ないことが残念でしたが、確実に宣教の場になっていると感じています。

また当日のクリスマス献金には89,891円が集まりました。この暖かいお気持ちは、フィリピンへの災害支援募金にさせていただきます。

最後に、クリスマス音楽の集いに出演してくださった皆様、裏で支えてくださった方々、お客様、すべての方にオルガンチーム員一同感謝しております。

今後も音楽がみなさんの祈りの助けとなりますように。

オルガンチーム 清水



《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

教会学校

1月11日(土) 始業式・お餅つき

三日月会

1月20日(月) 例会

📖 典礼部

1月18日(土) 典礼部会 10:00

📖 広報部

2月1日(土) 教会報印刷

📖 社会活動部

2月7日(金) 連絡会 初金ミサ後

📖 施設管理部

1月26日(日) 部会 10時ミサ後



《お知らせ》教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★社会活動部より★

1月5日(日) 10時 ♪越冬・越年炊き出し 東遊園地にて、炊き出し。(14時頃まで)

11日(土) 10時 ♪炊き出し (イグナチオホールお台所) 小野浜グラウンドにて配食や、
おじさん達のお話し相手だけでもOKです。

19日(日) 10時ミサ後 ♪ふれあい広場 (イグナチオホール) お弁当・食料品・手作り作品等

24日(金) 9時30分 ♪ともしび ケーキづくり お台所。

神戸活動センター・越年越冬炊き出し

2013年12月28日(土) ~2014年1月5日(日)

於：東遊園地 (神戸市役所南端)

カトリックの当番日 1/1 (水) & 1/5 (日) 10:00~14:00頃まで

(上記時間帯であればいつでもお手伝いOK!です。)



★墓地つこたより★

散骨についての法律的な見解

最近では従来型のかかり費用のかかるお葬式を嫌って、家族葬や友人葬、樹木葬や散骨を選ばれる方が増えています。ただ、散骨については合法的か否かについて不安と思われる方が多いとのことで、ここでご案内いたします。

10月号では、埋葬等を行う場合の手續に関わる法律である墓地、埋葬等に関する法律について記述しました。その法律は火葬した後の焼骨が墳墓に埋蔵されたり、納骨堂に収蔵するための手續についても定められていま

す。

しかし、散骨などの方法については特段の規制をしていません。更に、散骨が刑法 190 条の規定する死体(遺骨)遺棄罪に該当するかについて、法務省の見解(非公式)では、散骨が節度をもって行われる限りは違法性はないとしています。ただし、これを散骨容認と誤認された形で流布されてしまっているところがありますが、正しくは、ここで法務省が述べている「節度をもって行われる限りは違法性はない」という一般的な概念を述べているに留まります。

結論的には、節度を踏まえて行うのであれば海や山への散骨は違法では無いと言えます。散骨業者もあり生前から依頼することが出来ます。海への散骨は 5,6 万円とのこと。

カトリック六甲教会・墓地委員会 SF



新年会のお知らせ

おめでとうございます。去年は教皇さまも代われ、信仰年として充実した年であったと思います。今年はどうのような福音の年になるのでしょうか。1月12日(日)は教会新年会です。この日は新成人の祝福を兼ねて、10時ミサ後すぐ、イグナチオホールで開きます。

また、新しい受洗者の方々、昨年一年間に当教会に転入された方々もご紹介いたします。心づくしの食事と歓談、アトラクションもお楽しみです。ぜひご参加下さい。

日時：1月12日(日) 10時ミサ後 於：イグナチオホール

(新年会担当地区長・詫洋一)



《 図書室からのお知らせ 》

2013年12月に入った図書から

☆ わたしの聖書 —クリスティーナ・グディングス文 エミリー・ポーラム絵 女子パウロ会
神さまって どんなかた？ 聖書をよめば わかるよ。

聖書にあるお話しを集めて、すてきな絵とともに、子どもたちに、やさしく、温かく、わかりやすく語りかけてくれます。



☆ これからの日本のゆくえ——憲法改正問題を切り口として——福音の視点から

森 一弘 著 女子パウロ会

憲法改正の動きが一步一步と歩き出しました。憲法の根底にある価値観・世界観を、国家主義、民族主義的に変えようとするのがこの改正(?)の動きであることを説明しています。

フランス革命 明治憲法 現行憲法 自民党の憲法草案(2012年4月) と順に触れながら、この憲法改正の目指すものが革命の側面を持つことを指摘して、日本社会の無関心に警鐘を鳴らしています。基本的人権を謳ったドイツ憲法や「弱者の幸福」を明記したスイス憲法などを挙げて憲法の根底にある価値観・世界観を考えていこうと提案しています。

☆ 液晶画面に吸い込まれる子どもたち — 下田博次・下田真理子 著 女子パウロ会

「子どもたちにはぜひ幸せな一生を送ってほしい！」 そう願うお父さん、お母さん、先生方、パソコン、ケータイ、スマートフォンなどの情報機器は子どもたちの未来を大きく、豊かに、便利にします。けれど悪用や乱用をすれば深い闇の世界への危機が… ネット社会の子育てで、最も重要なことをまとめた必読の一冊。

☆ ソフィアの心に灯したい101の言葉 — 上智大学ソフィア会 編 ぎょうせい

今年創立100周年を迎えた上智大学にゆかりのある先人達からの101の言葉に、志とそれを追及する行動に支えとなる愛と勇気を見つけていこう。



『聖杯の前のマリア』

ジャン=オーギュスト



みんなの広場

お正月

ヨハネ 三好



新年と言っても人間が言わば都合によって定めた区切りに過ぎない。この区切りは時代によって、その地によって変わっています。時はそんなことにはお構いなく創造から終末まで同じように過ぎてゆきます。その裏には「貫く棒の如きもの」があることを意識しなくても。

今、教会で主日と同じように守るべき祝日は、「主の降誕」（十二月二十五日）と「神の母聖マリア」の祭日（一月一日）とされています。1年は「待降節第一主日」に始まりすべてがキリストによって支配されていることを思っています。

主がピラトに宣言されたみ言葉、「わたしの国はこの世には属していない」だがわたしたちはその属さないところに置かれています。人間が定めた区切りの始まる日は、現実のこの社会に生きてると無視はできません。ヴィクトール・シオンは「零点にとどまる」の冒頭にこう書いています。「キリスト信者にとっての危険は、神や人々とかくれんぼをすることではないでしょうか？ 主がわたしたちと同じ人間になってくださるため、天の栄光を捨ててこの世に降りてこられたというのに、わたしたちは、現実から離れたところで彼に出会うことができるのだと思います」。

主は「お前たちはパン種だ」と言われたと。パン種はその中に粉を膨らますものがなければ役に立ちません。今日は人間が作ったものでもその区切りのはじめ。自分はどの国に属しているのだろうか、「パン種」だろうか。

僕の日記を探したら元日0時のミサが始まったのは1996年1月1日でした。助任司祭だった松村神父様が新たにはじめたことでした。週報に例年の他に「1月1日、ミサは0時」と書いてあっただけ、いきなり真夜中に人が集まるのか。その日の日記には集まったのが200人ほどだったと書いていました。翌年から主任司祭オマリー神父様がこのミサを捧げました。もう20年近く続いているのですね。我が家の裏にはお宮、三カ日は大晦日の夜から人が絶えません。（終）

<p>教会報2月号の発行は、2月2日(日)です。 編集会議は1月26日(日)です。 記事原稿は、1月19日(日)正午までに信徒会館 受付へご提出願います。 (広報部) http://www.rokko-catholic.jp</p>	<p>カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21 電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6 発行責任者 松 村 信 也 編 集 広 報 部</p>
---	---